九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

小山勉著『トクヴィル―民主主義の三つの学校―』

伊藤, 洋典
熊本大学法学部教授

https://doi.org/10.15017/16452

出版情報：政治研究. 54, pp.173-175, 2007-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

紹介

小山勉著

『トクヴィル――民主主義の三つの学校――』

（ちくま学芸文庫、二〇〇六年、四六一頁）

本書は、長年トクヴィル研究に研鑽を積んでこられた著者の集大成ともいうべき書物であり、一貫した視点でトクヴィル思想の全体像と現代的意義について論じている。

本書を貫く視点は、どのようにして私的自己が公的自己となりうるかという問題であるといってよいであろう。著者はこの問題を、行政的権力が強大化し、政府依存症が蔓延する中で、いかにして公共精神を回復するかという問題として捉える。著者は、この公共精神の回復という問題こそトクヴィル思想の核心であるとし、その思想をより実践的に読み解こうとする。そのために、著者は「自由の体験学習」というユニークな視点を提示し、その体験の場をコミューン、陪審、アソシアシオンとする。本書が「民主主義の三つの学校」という副題をもつ所以である。

本書はこの三つの場について、トクヴィルがどのように捉えていたかを解明していく。まず、コミューンについては、これを中央集権に抵抗する地方分権の拠点として描かれ、トクヴィルの思想が「地方の自由」に基礎を置く政治的自立の思想であることが語られる。アメリカと対比してみて、アメリカはタウンシップから積み上げ方式で国家（連邦）が形成されている点が強調され、それと対比的にフランスの地方の弱さが指摘される。この弱さがフランスに政府依存症という病をもたらしているとされる。この地方の自由あるいは地方分権は本書全体のかなりの分量を占めており、まさに中心的論点となっている。

ただし、著者によると、トクヴィルの地方の自由という主張は、必ずしも中央集権の無条件の否定ではなく、その意味では「過激王党派」とは異なるのであるが、むしろ政治的中央集権と地方分権との調和にその主眼があったとされる。トクヴィルの批判は行政的専制支配に向けられていたのであって、政治的な中央集権自体は批判されていないとされる。

欲を言えば、当時の文脈で地方の自由というのが何を意味していたか、州の権限というのがどの程度あったのか、コミューンの政治的権限がどの程度であったのかという点について、もう少し歴史的な説明があればもっと理解が深まるように思う。

次に陪審制度であるが、これも自由と秩序の関係として述

べられるとともに、市民の参加という観点が中心となっている。人びとは利己主義的犯罪を裁くことによって公的自己を形成しうるというのである。

三つ目は、アソシアシオンについてであるが、これも本書の割かれている分量からして、大きな問題である。ここでも中心は、「個人の理性と意志はいかにして目的の共通性において公共性をもちうるのか、私的アイデンティティはいかにして公的アイデンティティたりうるのか」（三〇〇頁）という問題である。ここで重要と思われるのは、このアソシアシオンが個人主義の病理を正すものとして捉えられていることである。個人主義は、その病理形態において、原子化という公的世界への無関心と小世界への執着を呼び起こすとされる。アソシアシオンはそのような病理への矯正策となるのである。

著者は、トクヴィルの指摘として、古代の共和主義は徳に基づき、現代（トクヴィルの時代）のそれは利益に基づいているという違いを挙げ、重要なのは「正しく理解された自己利益」であるという。人びとは、アソシアシオンという「自由の体験学習」の場において、公徳心の体験学習も経験するのである。ここで著者の自由への視点は公徳心と結びつくことになる。

著者はここまで論じた上で、「公的自己」の追求という視点から論述されてきたトクヴィル思想の現代性について二つの問題領域において議論している。一つは市民社会論との関係において、二つ目は「ラディカルな個人主義」との関係においてである。両者とも公的事柄に対する「市民の総無関心化」への危機意識から論じられており、市民社会論に関しては、トクヴィルのローカル・アソシアシオンの考え方が補完性の原理とともに強調され、「ラディカルな個人主義」に関しては、「構成員が自分たちの目的だけを追求し、コミュニティ全体に対する責任を果たさないような社会は存続できないだろう」（四二五頁）という点が強調される。こうして実践における「相互行為」と「共同の自由」を通じた「自由の体験学習」によって、トクヴィル思想の要諦である公的自己の成立に関する議論の意義が今日的文脈において論じられる。

最後に全体を通読して感じたことであるが、本書は狭義の思想史研究というよりも、著者の現代日本に対する強い関心を背景として書かれているようにみえる。トクヴィル論の向こう側に来るべき社会のあり方への指針を示そうとする著者の姿もまた見えるように思われるのである。

（付記）本書の著者である小山勉先生は去る二〇〇六年十二月二十九日に急逝された。最後まで研究への情熱を燃やし続けてこられた先生のお姿が脳裏に浮かび、学部・大学院を通

じて謦咳に接したものとして悲しみに堪えない。衷心より哀悼の意を表したい。

（伊藤洋典）

石川捷治・中村尚樹著

『スペイン市民戦争とアジア――遥かなる自由と理想のために――〈九大アジア叢書6〉』

（九州大学出版会、二〇〇六年、一六七頁）

本書は、「スペイン市民戦争」とアジアとの関連を現代的な視点から、再検討した著書である。構成は、研究者（石川捷治）による章とジャーナリスト（中村尚樹）による章からなり、プロローグ「今なぜスペイン市民戦争か」において、スペイン「内戦」を「市民戦争」と敢えて呼ぶ理由とそれがアジアという視点からみた場合「現代的内戦」の起点となることが説明される。第一章「スペイン市民戦争と現代」では、内戦の歴史的経緯が簡潔に叙述され、第二章「今日のスペインに見る市民戦争」では、現代スペインにおける「市民戦争」の意味を現地におけるルポという形で追っている。また、第三章「スペイン市民戦争とアジア」では、「市民戦争」と当時のアジア（中国、朝鮮、フィリピン、インド、ベトナム）との関係、とりわけそれに参加した人びとの相貌を簡潔明瞭に記している。第四章「スペイン市民戦争と日本」では、日本と「市民戦争」との関わりを、第二章同様に現地ルポという形で追っている。エピローグ「内戦を越えて」では、現代的意義として「市民戦争」における市民の主体性が着目され、今後の日本のあり方を考える際の重要な視点として喚起されている。

本書の特長は、研究者とジャーナリストによる二つの異なる立場並びに視点を織り交ぜることによって、「市民戦争」の意義を過去と現在という二つの視点から捉え直した点にある。また、新書という形式に如実に現れているように、本書は一般読者を想定して、歴史事項に関するコラムやたくさんの写真を駆使して、たいへんにわかりやすい叙述になっている。しかも、歴史的経緯や政治学用語の丁寧な説明並びに現地ルポという形での親しみやすさなど、一般書としての工夫が随所になされている。その意味で、新書としてとても読みやすい内容になっているといえる。構成も現代的な問題意識や状況から、過去に遡り、考察するという形式になっており、この点もまたわかりやすさの要因となっている。

従来、「市民戦争」は「内戦」といわれてきたように、市民という視点は、比較的希薄であり、むしろ過小評価されてき